

紹介

介

○營城子 前牧城驛附近の漢代壁畫甌墓

東方考古學叢刊 第四冊
内藤寛・森修 著

世に漢代の遺物は少くない、しかし、その畫蹟を傳ふるものに至つて實に寥々たるものである。嘗つて遼陽太子河畔に壁畫ある石槨墓が發見せられ、その槨室は旅順關東廳博物館の庭に移し牧められてゐるがその畫蹟はもはや湮滅して、今日これを想像することすら不可能な状態にある。昭和六年夏關東廳博物館によつて發掘せられ、いまこゝに報告された關東洲旅順管内營城子の一甌室墓はその少い漢代繪畫資料の最も重要な一つを提供するものである。しかも、この甌室墓は豫め計畫され博物館員、殊に内藤寛・森修兩氏の周到なる用意のもとに發掘せられたもので、その墓室内遺物出土の状態も遺憾なく知り得られるし、殊に英断を以つて試みられた古墳全封土の除去は該墓築造の経緯を詳細に物語る資料を得て、學術的に甚だ興味深いものである。

その際、發掘せられた墳墓は二基で、その第一號甌墓は主室前室、東側室を有する三室墓である。構造は普通、南甬、北甬に見る塋室墓とほぼ等しい。それから瓦屋、瓦甬、瓦盤、瓦洗

瓦条、瓦杯、瓦勾、瓦燈、瓦甕、瓦壺、瓦家、瓦大等の明器が發見された。第二號甌墓は壁畫のある古墳で、主室、前室、後室、東側室を有する四室墓であるが、その主室は内部中央にさうに小主室を有して二重になり、内部主室の套室を形作つてゐる。その築造に當つてはまづ地下十六尺位掘下げ、そこに紋甌を二層鋪いて床となし、その上に各室を築き、後、接續して拱門を取付けたのである。その上に封土が、少くとも地上十五尺までは積まれたのであるが、それは單に土を積上げたといふだけでなく、粘土を練り固めてそれを縱位置に積重ねたり、地上七尺位の個所では粘土を焚灼して、固めたりしてその鄭重な工作の程が知られると云ふ。壁畫は甌壁に漆喰を塗つて、小主室の内外にあり、神人、人物、雲、龍、虎、鳥、怪物、衛卒などを墨で素描し、間々朱と黄土とを副へる。幼稚と云へば幼稚だが仲々達者に筆が運ばれ、當代の面目をよく傳へてゐる。明器には瓦屋、瓦甬、瓦燈、瓦条、瓦盤、瓦杯、瓦勾、瓦匣、瓦洗、瓦甕、瓦壺、瓦甬その他があり、殊にその流雲彩文のある五枝燈は珍しい。

本文三六頁、圖版四七葉、別に濱田耕作博士「漢代の繪畫に就いて」、水野清一「營城子古墳の壁畫に就いて」の二篇を附載する。(昭和九年刊、丸善發賣、定價一七圓)

○新日本圖帳 藤田 元 春著

先號に中華民國新地圖を紹介した際に、我國にも、更に優秀なる地圖帳の現はれん事を待望したのであるが、我々の期待に叛

かざる、しかも驚くべき廉價を持つて新日本圖帳が発賣さるゝに至つた事は、學界は勿論の事邦家の爲に慶賀に堪へない。著者藤田元春氏の勞苦、製圖者木崎盛政翁の精進の發行者刀江書院主の犠牲とは、本書を讀く者の等く敬服し感謝の念を禁じ得ざるものである。地圖の編纂は一朝一夕にして可能なるものではない。本書の出現の根底には我が陸地測量部の多年に亘る業績があり、又直接には十三年前(大正十三年)に出版された小川博士の日本地圖帳がある。殊に後者は本書の著者藤田氏が小川先生指導の下に實際上編輯の任に當られたもので、その費き經驗が本書に於て生かされたものと云はねばならない。日本地圖帳は一尺×八寸の體裁で圖版六十一を含み、約五百頁に達する別冊の地名索引を有し文字通り浩瀚なもので、永久にその價値を失はないものではあるが、價額もそれに比例して一部三十五圓と云ふ高値であり、何人もが座右に備へると云ふ理に行き兼ねる憾があつた。然るに本書は、一部僅かに五圓八十錢であり、之ならば單に地理歴史の専門家だけではなく、一般民衆の使用にも堪へるものである。勿論體裁は菊版、圖版三十四葉、更に二百十六頁の地名索引が綴込まれて日本地圖帳の縮約された形ではあるが、著者の要領よき編輯と、十餘年間に於ける我邦印刷術の進歩は、その内容をして殆んど、前者に比して遜色なからしめて居り、日本の最近の狀況を寫し出せる點に於て、何者にも換へ難き價値を有し、索引が綴込まれて横組となつた事は使用者にとつて非常に便利となつた。以下兩者の内容を更に詳細に検討

するに、日本地圖帳は各地方五十萬分一縮尺を基圖とせるに對し、新日本圖帳は體裁の縮少の爲に百萬分一縮尺を以てしてゐるから、一般に地名が減少した事は止むを得ない處で、又前者にある五萬乃至七萬五千分一重要市街圖が省かれたのも致方なからう。しかし、京濱、名古屋、京阪神、北九州の二十五萬分一圖はケバ書を用ひて地勢を明瞭ならしめたと共に、驚くべき市街地の發展が表現されて居り、之を日本地圖帳所載のものとは比ぶるならば一目以て大都市發展の趨勢を伺ふ事ができよう。尙大日本地圖質圖、日本雨量、等時線、海流等が新に加へられて居り人文の基礎をなす自然環境にも注意が拂はれた事は、前者の欠を補つたものであり、尙滿洲國南部關東州、滿蒙地方地勢交通圖等が新載された事は時代の要求に叶つたものである。之を要するに、本書はその學的價値に於て、日本地圖帳と共に、大正昭和に於ける我邦地理學の壓縮として地理學史上不滅の光輝を放つものであると共に、その低廉なる價額は多數の購讀者を得て、地理的認識の普及に貢獻する處大なるべきを信じて疑はない。先に、中華民國新地圖、今又新日本圖帳を得て、我々は東洋に於ける地理學復興の氣運が澎湃として起り來つた事を感ぜざるを得ない。この際に當つて、著者の提言された如き、一つのインスチチュートが設立され、更に清新確實なる地圖を出版すると共に、その基礎となるべき探險調査の行はれん事を希望したい。(米倉)